

『モダン・タイムス』と『メトロポリス』に関する比較文化論的考察

—文明批判映画に現われる個人主義的社会と権威主義的社会—

服 部 裕

Individualismus und Autoritarismus in der Zivilisationskritik von "Modern Times" und "Metropolis"

Hiroshi HATTORI

Zusammenfassung

Die beiden Filme, "Modern Times" und "Metropolis", teilen dasselbe Thema, das in der Kritik an der kapitalistischen modernen Zivilisation besteht. Im kritischen Licht stellen sie die mechanisierte Lage der Menschen in der hochindustrialisierten Gesellschaft dar, die Entfremdung und Manipulierung des Individuums verursacht. Welche Weltanschauung und welches Werturteil die beiden Filme in ihren Zivilisationskritiken zeigen, ist jedoch anders, ja sogar gegensätzlich. Einerseits wurzelt die Zivilisationskritik in "Modern Times" im Glauben an den Individualismus, andererseits beruht diejenige in "Metropolis" auf dem Autoritarismus. Chaplin sucht in "Modern Times" ständig als Individuum seine Freiheit zu erringen, während die Menschen in "Metropolis" nur erwarten, aus ihrer unterdrückten Lage gerettet zu werden, indem sie sich "einen guten Herrscher" wünschen, der sie zu ihrer Befreiung führen sollte. Diese gegensätzlichen Einstellungen zum Leben, die trotz derselben Zeitlage parallel bestehen, werden nicht auf verschiedene persönliche Weltanschauungen der beiden Filmautoren, C. Chaplin und F. Lang, zurückgeführt, sondern spiegeln die gegensätzlichen Weltanschauungen der Gesellschaften wider, in denen die beiden Regisseure lebten.

はじめに

近代文明が育むみ、同時にその発展の原動力ともなった機械技術と大衆社会が生み落とした最も物質文明的な芸術である映画は、すでにその草創期において生みの親である機械文明社会の本質を射抜く表現力を身につけていた。特に20年代のドイツ表現主義映画は、一貫して近代社会の諸相をその批判的表現の射程に納めている。それは近代精神の発現である資本主義社会と、その発展によってより複雑化するとともに透視しがたくなっていく支配構造を浮き上がらせようとする光の照射であった。ヴィーネの『カリガリ博士』、ムルナウの『ノスフェラトゥ』、そしてラングの『ドクトル・マブゼ』が権力を具象化しようとする映像であるとすれば、スタンバーグの『嘆きの天使』は新時代の自由主義的=資本主義的な支配構造のなかで翻弄され、自らの社会的な存在基盤と精神的安定を喪失していく旧時代の未熟な市民を描き出すという意味において、十分に文明批判的な性格を有している。

そうした文明批判的な映画のなかで、機械化された資本主義社会における人間性の疎外をより直接的に映しだしているのがフリッツ・ラングの『メトロポリス』(1926)である。そこでは、文明は単に人間ならびに人間性と敵対する無機質な機械装置として映しだされるのではなく、徹底した人間支配を目指す権力の従順かつ合理的な僕であり、強固な社会的支配構造を構築する装置として描かれている。つまり近代的な機械装置の冷酷さは、人間の感情にはまったく頓着せず人間そのものを自らの歯車として機械化してしまう事実のなかだけではなく、その機械装置を自分の目や手足として徹底的かつ直接的な人間支配を実現しようとする権力の合理性のなかにこそ認められるのである。その意味で、近代文明は合理化された支配構造と同義であると考えてもさしつかえない。この認識を出発点として、如何にして人間が機械化された権力と闘うことが可能であるかということ問うたのが『メトロポリス』である。

『メトロポリス』と同様に、近代文明の本質とそれと闘う人間を描いているのがチャップリンの『モダン・タ

イムス』(1936)である。そのタイトルが示すとおり、それは近代という時代そのもの、つまり近代社会という牢獄のなかで生きなければならない人間の抑圧された状況と、そこから脱出する可能性を映しだそうとしている。このように『モダン・タイムス』はその主題設定において、『メトロポリス』と極めて近い位置関係にあることがわかる。にも拘わらず、この二つの文明批判映画のなかで展開する世界はまったく異なる、敢えて言えば互いに対立しあう価値観に貫かれている。結論を先取りして言えば、前者が近代文明批判的な視座を貫きながらも、あくまでも近代精神の根幹を成す個人主義への信念によってそれを乗り越えようとしているのに比べ、後者は個人(=近代精神)を抑圧する(近代文明化した)専制的な権力を打破しようという試みが、個の力によるのではなく、専制を支える悪しき権威主義の代替物としての「善き権威」によって実現されると信じているということである。

この両者の相違はどこからきて、どんな意味をもってしているのか。この問いに答えることが本稿の目指すところである。同じ時代状況のなか、同じ敵に向かって、まったく相反する価値観をもって闘いを挑んでいるこの二つの映画の相違は、単に異なる価値観をもつ二人の映画作家個人にではなく、二人が生きた地域、つまりアメリカ合衆国とドイツそれぞれに固有の価値観の相違に起因していると考えるのが妥当である。何故なら、この二つの映画に現われるそれぞれの価値観は、それぞれの地域の他の多くの映画にも共通して認められるからである。以下本稿では『メトロポリス』と『モダン・タイムス』を手掛かりにして、同じ時代状況のなかに現われた二つの相反する価値観について比較文化論的に考察してみたい。

1. 支配者

権力としての資本主義的搾取者に反抗する抑圧された労働者。これが、『メトロポリス』と『モダン・タイムス』に共通する主題である。両映画の主題のあいだに見られる強い類縁性は、労働者の一団が隊列をなして工場に飲み込まれていく冒頭のシーンの類似にすでに象徴的に現われている。モダン・タイムスの労働者は工場に吸い込まれていく家畜の群れになぞらえられ、メトロポリスの労働者たちは個性を喪失した人間の一群として、これも怪物の口のように装飾された工場の入り口のなかに行進していく。さらに、労働者を搾取する企業家がオフィスにいながらにして自動カメラを駆使して、すべての労働者と生産ラインを徹底管理している支配形態の同一性も、この二つの映画の共通した原点を明らかにしている。チャップリンもラングも、機械化された生産形態による

人間そのものの機械化と機械化=合理化された人間支配に対する人間の反抗を映しだそうとしている。つまり、彼らは資本主義的合理主義という同一の怪物を敵にまわして闘っているのである。

このようにその主題は、チャップリンにとってもラングにとっても実に明快であり、共通のものである。ところが、彼らが如何に闘い、何を目指して闘っているのかということを考えてとき、この二つの映画のあいだに極めて大きな価値観の相違が存在することが見えてくる。20世紀前半の高度に発展した産業資本主義を基盤にした共通の社会状況に対する闘争でありながら、その闘いぶりはまったく背反する価値観に支えられたものであるとさえ言えるのである。この価値観の相違は偶然の産物ではない。それは、その時代のアメリカとドイツの社会を貫く価値観の相違そのものの反映なのである。

労働者=人間を抑圧する支配者は、上述のとおりいずれの映画においても資本主義的経営者である。しかし、この共通項にも拘わらず、二人の支配者のあいだには決定的な違いが存在する。モダン・タイムスの場合、労働者を支配する資本家はあくまでも経営者であり、そこには社会的抑圧者を超越の意味は付与されていない。労働者チャップリンと抑圧的な経営者とを区別するものは社会的地位のみであり、人間としての上下の差異は具象化されていない。一方、メトロポリスの支配者には社会的抑圧者の相貌に加えて、息子を抑圧する強い父親の顔が与えられている。メトロポリスにおける社会的権力は、自由競争の勝利の結果として獲得されたものであるという意味以上に、人間の社会的関係を固定化する権威に裏付けられたものとして立ち現われる。メトロポリスの支配者は父が息子を抑圧するように、社会のすべての人間をその権力=権威の下に支配する。モダン・タイムスの経営者の支配が純粋に資本主義的な経済学的概念の枠内にとどまっているのに反し、メトロポリスの支配はより形而上学的な権威主義のメカニズムのうえに構築されているのである。これは、資本主義による人間支配が、精神的レベルまで拡張され徹底されていることを意味している。政治的にはようやく共和制を達成したドイツ(ワイマール共和国)であるが、市民は社会的にはいまだに帝政期の権威主義的支配の意識を払拭するには至っていなかったのである。このように、アメリカ合衆国とドイツにおける資本主義的な支配構造は、その根本で本質的な違いをもっていたとすることができる。前者が機械化された自由競争による純粋に資本主義的な支配構造に立脚した社会—もちろん白人社会という意味であるが—である一方、後者は長い伝統をもつ権威主義の意識構造に立脚した資本主義的独裁社会の可能性を内包していると見做すことができる。『メトロポリス』の制作からわ

ずか7年でドイツの独裁体制が現実になることを考えると、この映画が予見しているものは単に鋭敏な映像芸術家の直観によるものではなく、ドイツ社会の権威主義的傾向の必然的な表出であったと考えざるをえない。

2. 反抗者

チャップリンといえば、放浪者と相場は決まっている。ところがモダン・タイムスのチャップリンは真面目な労働者である。ベルトコンベアーにのって流れてくる部品のネジを、流れに遅れないように必死になって猛スピードで締める。これがチャップリンの仕事である。まったく単調な同じ作業の繰り返し。これが分業化された近代的な機械作業の本質である。そこに生産性というスピードが加わる。機械による資本主義的生産は、自らがもの全体を作るという自律した労働形態を人間から奪ってしまった。機械は人間がものを作るための道具というより、人間をその一部として働かせるものとなる。機械の人間支配であり、人間の機械化である。生産性をさらに上げるには、ベルトコンベアーのスピードをアップするだけでよい。スピード＝生産性についていけない人間は、チャップリンのようにまさに機械に飲み込まれてしまうのである。

ところで、放浪者チャップリンには労働はあまり似合わない。資本主義的生産についていけないチャップリンは、結局神経がまいてしまう。まるい円盤状のものなら女性の服のボタンでも何でもネジに見えて、条件反射的にスパナで締めてしまう。チャップリンにはやはり労働者は無理で、またいつもの放浪者に戻る。無一文の放浪者チャップリンは一見資本主義社会の落伍者のようであるが、実はそうではない。チャップリンは自らの意志で労働を放棄し、資本主義的成功に背を向けているのである。日々の糧以外に彼が必要としているものはただ一つ、それは完全なる自由である。なるべく自由を失わなくてもすむように、彼は最低限の糧しか求めようとしない。いざとなれば、刑務所のなかで得る糧でも事足りる。チャップリンが仕事もせず貧しいのは、その代償に自由を保持したいからなのだ。愛する娘との生活のために働くことを決心するときの言葉は、むしろ必要以上の労働などしないというチャップリンの意志を逆説的に表現している。彼は言う：“I’ll do it! We’ll get a home, even if I have to work for it.”（下線は引用者による）つまり、この労働しないという意志は、人間を抑圧する資本主義的生産システムから自由であろうとする、非常にラディカルな闘争への意志を意味しているのである。

それとは対照的なのがメトロポリスの主人公フレダーである。フレダーは資本主義的独裁者である父に反抗す

る手段として、裕福な環境を捨てて労働者の側に立ち、彼らと同じ仕事を果たそうとする。しかしフレダーが労働者の重労働を補ったところで、労働者たちが置かれた状況は少しも変わらない。労働者に彼が提供できるものは、いわば心の連帯だけである。さらに、フレダーは労働者にチャップリンのような労働の拒否（ストライキ）を呼びかける代わりに、労働者と独裁者の心に訴えることで両者の調停を果たそうとする。

独裁者の抑圧を受けている当の労働者たちも、自分たちが置かれた状況を自らの意志で変えようとはしない。彼らはチャップリンがしたように、自ら労働を放棄することで独裁的な支配に反抗しようとすらしめない。彼らが求めるのは、純潔なマリアが与えてくれる心の安らぎだけである。そして、そのマリアも労働者たちの自由への意志を喚起する代わりに、手（労働者）と計画者（支配者）を心で調停する調停者が現われる日まで辛抱強く待つことを説く。つまりマリアは救世主の出現を予言する聖者の役割を果たしているのであり、人間の自由とそれを可能にする社会変革を訴えることはしない。メトロポリスの労働者たちは、自発的に自由への意志を表現することは決してないのである。彼らがつねに一群の集団としてほとんど「装飾的」¹⁾に映しだされているという事実は、労働者は単なる概念としての存在でしかないこと、つまり一人ひとりの生きた人間としての意志と実在はまったく欠落してしまっていることを物語っている。独裁的支配から労働者を解放したいという独裁者の息子フレダーの意志にも拘わらず、当の労働者は自ら状況を打破しようという主体性とはいっさい無縁の存在でしかない。この意味で彼らは、つねに自らの主体的な意志にしたがって生きようとしている放浪者チャップリンに対して、明らかに対極的な位置にいるのである。

3. 闘い

自由を愛するチャップリンの社会的立場が労働者のそれに最も近いことは、『モダン・タイムス』のいくつかのシーンが十分に物語っている。チャップリンが夜警をしているデパートに空腹を満たすための最低限の食べ物求めて押し入った泥棒は、前に勤めていた工場の同僚たちで、チャップリンにはそれを取り締まる気持ちはまったくない。あるいは、それと知らず偶然赤旗をもって労働者のデモ隊の先頭に立って行進してしまう姿は、労働者に対する親近感に満ちている。しかし、労働者に対する親近感にも拘わらず、チャップリンは決して彼らの集団のなかに自らの居場所を求めようとはしない。チャップリンの人間に対する関係は、純粹に個人主義的である。彼の目差しはつねに個人としての人間にむけられ、決し

て集団や組織へとはむかわない。チャップリンにとっては、それがいかなるものでも組織は個人の自由を何らかの形で制限するものだからだ。チャップリンは冒頭の字幕で、この映画は「人間性による個人の幸福の追求」の物語であると明瞭に述べている(傍点は引用者による; 原文では次のとおり: A story of industry, of individual enterprise — humanity crusading in the pursuit of happiness)。ここに、メトロポリスのフレダーの人間に対する関係との本質的な相違が見えてくる。チャップリンがまず自分という個人の自由と幸福のために闘う一方で、フレダーは一群の労働者(人間)、強いて言えば概念としての労働者(人間)に自由を与えようとして闘うのである。逆に言えば、メトロポリスの労働者はひたすら自由と幸福を与えてくれる善き権力=権威を待望するだけで、そこにはチャップリンのように自分個人の幸福を追求する姿は認められない。

労働を拒否するラディカルな自由人チャップリンの闘いは、その個人主義的性格が故に本質的に孤独である。徹底した個人主義者チャップリンは幸福であるために自由を求めるが、自由には孤独がつきまとうからである。しかし、自分ひとりだけの幸福、孤独な幸福は完全なものではない。幸福を他者と共有してはじめて、自由人チャップリンは真に幸福であると感じることができる。つまり、チャップリンの幸福はひとを愛することである。放浪者チャップリンの完全な自由、だがそれ故に孤独である自由はあらゆる制限を拒絶しようとするが、ただ愛による制限だけは受け入れることができる。すでに上で引用した「たとえ働かなくてはならなくても……」という言葉が示しているように、身寄りのない貧しい労働者の娘への愛だけが、チャップリンにもう一度働くこと、つまり自由を制限することを決心させるのである。

メトロポリスのフレダーも愛故に闘うことを決心する。しかし、フレダーのマリアへの愛はチャップリンのそれとは異なる。彼の愛は生きたひとりの対等な人間への愛ではなく、支配者の息子であることの心の苦悩と罪を癒し救済してくれる神的な存在への信仰的な愛である。マリアは、神が啓示をたれるときに送る天使のように突然フレダーのまえに現われ、彼を地下の労働者の世界へと導く。つまりフレダーは、抑圧されている労働者たちを救済する調停者として神によって選ばれたのである。マリアは労働者に心の安らぎを与えるのと同様に、フレダーには罪と苦悩から救われるための試練を課したのである。

このように、フレダーのマリアに対する愛と、マリアのフレダー並びに労働者に対する愛の在り方は、チャップリンと労働者の娘の愛とは本質的に異質なものである。チャップリンと娘の愛が自由で対等な個人のあいだに芽

生えた人間的な愛である一方、マリアの愛は神が人間に対して与えるような施しの愛であり、フレダーと労働者のマリアへの愛は救済を求める信仰的な愛である。愛の解釈に見られるこの相違は、アメリカの思考と戦前のドイツの思考が如何に対極的な関係にあったかということ象徴的に物語っている。前者が人間の社会的関係はあくまでも対等な個人のあいだの信頼を前提とした自由主義的なつながりであると解釈する一方で、後者は人間の社会的関係も人間の神への隷属的關係と同質のものとする権威主義的な世界観に貫かれていたと言えるのである。群れとしてしか映しだされることのないメトロポリスの労働者たちは、思いもかけず帝政から解放されてしまったワイマール共和国期のドイツ市民の心的状況を代弁している。彼らは自らのアイデンティティをそこに見いだしていたドイツ帝国の没落を目の当たりにして、埋めがたい喪失感に囚われていた。彼らは、チャップリンとそのパートナーが一たとえ社会的には弱者であるにしても一もっている自立した個人としてのアイデンティティを獲得するには、社会学的意味においてまだ余りにも未熟であったと言えるのである。

4. 善き支配者

個人としてのアイデンティティをもつことの意味など、メトロポリスの住人たちは独裁者を除いては誰ひとり知らない。労働者たちは抑圧と支配から解放されるには、自分たちにまず何が必要なのか見当もつかない。彼らは支配が誰か上に立つものによって執行されるものであるのと同じように、解放と自由も誰か上に立つものが施してくれるものと信じている。彼らは自ら支配者と対決する代わりに、マリアに心の慰問を求め、マリアは彼らの自立を目覚めさせる代わりに、彼らと支配者のあいだを和解させる調停者が現われるまでの忍耐を説くだけである。彼らには、社会は自らの意志と手によって築くものであるという認識は少しもない。いまの社会が悪いのは支配者が悪いからで、善き支配者が現われれば社会も善くなるを考える。彼らのマリアに対する精神的な依存は、独裁者への社会的隷属とまったく同質の意識構造をもっているのである。

個人として自立した意識をもたない大衆をまえにしたとき、彼らは力だけで抑圧するより、心を操作することによってより効果的かつ完全に支配できると独裁者が考えるのは当然の帰結である。メトロポリスの独裁者は大衆の心の支配を実現するために、マリアの姿をしたロボットを作らせる。しかしマリア・ロボットは暴走し、メトロポリスの動力源であり労働者を酷使する工場の機械を破壊するように彼らを扇動する。労働者の破壊活動によ

て彼ら自身の子供たちが住む地下の町は洪水に襲われるが、本物のマリアとフレダーの努力によって子供たちは救われる。しかし労働者たちは自分たちの間違っただけを省みる代わりに、扇動したマリア・ロボットにすべての責任と罪を押しつける。これがまさに、自由の前提である自己責任を放棄し、他者に隷属することしか知らない非自立的な人間の姿である。それは、つねに自分の責任のもとに孤軍奮闘する自由人チャップリンとは正反対の価値観に支配された、権威主義的人間の姿であるとも言える。

では抑圧される大衆を助けようとするフレダーとマリアは、大衆の権威主義的性格とは無縁であろうか。もちろん無縁であるはずはない。フレダーとマリアが労働者たちを独裁者から解放しようとする試みは、彼らに自立的な自由への道を示すに足る反権威主義的な性格を、まったくと言っていいほどもっていない。すでに述べたように、労働者たちが信頼を寄せることができた唯一の人間であるマリアは、彼らの自立への意識を喚起し共に闘う可能性を完全に放棄してしまっている。マリアが彼らに示し、求めているのは、賢者である自分の言葉に耳を傾け、ひたすらその言葉に従うことである。マリアの地下の集会所は政治的集会の場ではなく、神＝絶対者への隷属を確認する教会とまったく同質の機能を果たしている。マリアの集会の場面がこの映画の本質との関わりで特に重要な意味を持っているのは、大衆が従うべき権力＝権威が慈悲深い神であるのか、あるいは邪悪な力であるのかという伝導者の倫理を問題にしているからではなく、大衆を自らの足元に跪かせることによってより強い力への隷属を揺るぎないものにしようとする権威主義の本質を明らかにしているからである。大衆が隷属する力が悪しき力であるのか、善き力であるのかという問題は本質的に問う意味がない。重要なのは大衆が自らの意志と判断を放棄して、ひとつの権威（マリア）に盲目的に隷属しているという事実である。だからこそ独裁者はマリア・ロボットを作らせ、大衆の支配を完全なものにしようとしたのである。本物のマリアによる大衆の心の支配も、マリア・ロボットによるそれも、人間個人の意識の自由を奪うという意味においては本質的にまったく同義である。しかるにメトロポリスの大衆は最終的にマリア・ロボットによる支配に「悪」を、本物のマリアによる支配には「善」を見てしまうのである。彼らの近代的個人としての未熟性は、善き力への隷属は悪しき力へのそれとは本質的に異質なものであると見做し、自己以外の力に隷属することそれ自体の問題性を見落としているところにある。マリアとマリア・ロボットは一枚のコインの表と裏であり、実体はただ一つなのである。

善き力に大衆を導いていると確信しているマリアもフ

レダーも、そして終始他者に隷属することしか知らない労働者たちも、誰ひとり自己の自由を喪失していることに気づこうとしない。だからこそ彼らは独裁者の突然の改心を何の疑いもなくナイフに受けとめ、和解することができてしまうのである。マリアの言葉に促された調停者フレダーの手を介し、独裁者と労働者の代表がちりちりと手を握り合うラストの和解のシーンは、メトロポリスという権威主義的社会がいよいよ大きく完成に近づいたことを不気味に暗示している。「表面的には、フレダーが彼の父親を改心させたように見えるのであるが、実際には、実業家はその息子をだしぬいたのである」⁹²とクラカウアーが言うように、権力者は力だけによらない、まさに心の操作を介しての大衆支配を完成させる可能性を手にいれたのである。ラストシーンにおいても、労働者たちはいまだに一群の集団として装飾的に映しだされている。その隊列は映画の冒頭のシーンの打ちひしがれた無力な隊列とは異なり、見事に均整のとれた秩序の力強さが漲っている。まさに、強固な権威主義に支えられた全体主義の秩序である。そして、この映画の数年後、ドイツが現実的にメトロポリスの全体主義を完成させた事実を考えると、ここに展開している権威主義のメカニズムが如何にドイツ社会の深層に根づいていたかということが察せられる。

おわりに

以上、『メトロポリス』が第二帝政期からワイマール共和国期の現実の近代ドイツ社会およびドイツ人の権威主義的意識の具象的映像であり、その一方で『モダン・タイムス』は自由主義に基盤をおいた機械文明社会の人間疎外と、それに対する個人の抵抗の物語であるということを示した。いずれも近代文明がもたらした人間支配に対する人間の反抗と可能性を映しだそうとしているものの、両者の向かう方向はほとんど逆方向であるとさえ言えることもわかった。メトロポリスの人間たちが、自由を求めて権力と闘っているにも拘わらず自由の喪失を決定づける権威主義の呪縛から一歩も抜け出せないのに反して、「人間の機械化」に対して抵抗し自由を守ろうとするチャップリンの闘いは、あくまでも「自由な個人」であり続けることだけに収斂している。そのためチャップリンの闘いは、資本主義体制にあっては極端にラディカルな戦法をとっている。それは、最低限の糧を得る以上には労働しないということであり、社会的成功やエスタブリッシュメントを求めたり、ましてやメトロポリスの人間たちのように権力との和解など決して求めないということである。権力とのみせかけの和解はもとより、どのようなものであれ組織の構成員となること

できえ、自由人チャップリンにとっては個人の自由の制限を意味している。この意味で、チャップリンはラディカルな個人主義者であり、自由主義者であると言える。とはいえ、チャップリンが自由な他者との協調性を欠き、破壊性を身にまとったニヒリストでないことは明白である。なぜなら、愛だけは彼の自由を制限しうるからだ。さらに言えば、愛によって自由はより完全なものになる。つまり、チャップリンは他者を愛することによって始めて、自由を他者と共有することができると信じているのである。権威主義から自らを解放し、自由を勝ち取った近代的個人が陥った孤独と無力感を、チャップリンは愛によって克服しようとしているとも言える。愛する娘との生活を保障するかにみえたレストランでの仕事をチャップリンも娘も共に失ってしまうが、二人には愛と自由が残されている。丘の向こうまでまっすぐ続いている一本の道を、手と手を取り合って歩いていく二人を映しだすラストシーン。「負けるもんか！」という毅然とした娘の表情を、チャップリンは優しく微笑みに変える。それは彼らの闘いがただ暗く厳しいものではなく、自由という明るい希望にまっすぐ向かっていくことを確信している微笑みである。

チャップリンの確信は、確かに現実には容易く実現できるものではない。しかしそこには、権威主義のまえに屈服してしまったメトロポリスの人間たちにはない個人としての人間の自由への意志と希望がある。チャップリンが求める自由とは、フロムの言葉を借りれば「積極的な自由」⁶⁾ということになる。フロムによれば「積極的な自由」とは、「自由でありながら孤独ではなく、批判的でありながら懐疑にみだされず、独立していながら人類の全体を構成する部分として存在できる」ような人間の内的状態であり、それは「全統一的なパースナリティの自発的な行為のうち存する」のである。⁴⁾

しかし、近代における自由主義と権威主義は単純な対立概念として存在するのではない。自由と権威の内的関係はより複雑な様相を示している。フロムの理論によると以下ようになる。宗教改革によって伝統的権威（つまりカトリック教会の権威を背景にした諸々の中世的支配構造）の外的束縛から解放された近代的個人は、信仰において見せかけの自由を獲得するが、一方では教会の権威と支えを失った結果、孤独と無力感そして救済への不安に襲われる。さらに科学と資本主義の発展は、個人により強い独立の感情、つまり自律的かつ批判的な態度を芽生えさせるが、その一方では生産機構への依存を強化することになる。個人は自由な競争にさらされることでますます孤立し、失敗への不安は増大する。このように、労働においても人間は自らの営みの主人ではなくなり、「資本が人間の主人となった」⁵⁾。社会における行動

の自由を拡大した人間は、その代償として共同体への連帯感と労働の自律性を失い、自らを孤独で無力な存在と見做さざるを得なくなってしまった。こうした人間の内的状況は、資本主義が発展すればするほど危機感が増大し、機械化が飛躍的に進む19世紀後半から20世紀初頭にかけて最初の危機的ピークを迎えるのである。チャップリンやメトロポリスの人間たちは、まさにこの危機的な内的状況に置かれていると言える。

孤独と無力感をまえにしたとき、人間がその原因である外的な自由に対して示す反応にはいくつかの類型があるとフロムは考える。一つは、孤独と孤立の感情に襲われた個人は疑いと不安に耐えきれなくなり、「新しい服従と強制的な非合理的活動」⁶⁾へかりたてられることである。これが権威主義であり、「権威主義的思考に共通の特質は、人生が、自分自身やかれの関心や、かれの希望をこえた力によって決定されているという確信である。残されたただ一つの幸福は、この力に服従することにある」。⁷⁾メトロポリスの人間たちは労働者もマリアも、そしてフレダーもみなこの権威主義的思考の枠のなかで自由と幸福の夢をみているのである。あるいは別の個人は、自分であることをやめることで孤独と不安から逃れようとする。彼は「他のすべてのひとびととまったく同じような、また他のひとびとがかれに期待するような状態になりきってしまう」。⁸⁾こうして彼は「個人的な自己をすてて自動人形となり、周囲の何百万というほかの自動人形と同一となった人間は、もはや孤独や不安を感じる必要はない。しかし、かれの払う代価は高価である。すなわち自己の喪失である」。⁹⁾これは、資本主義が極度に発展したまさに「モダン・タイムス」に生きる多くの正常なひとびとの内的状況であると言える。「自動人形化」とはいわば自己が「匿名の権威」¹⁰⁾、たとえば社会的成功や富の形成といった「常識」に内的に呪縛されていることに気づかず、あたかも自由な個人として生きていると錯覚している状況を意味している。チャップリンの反抗はこうした自己の「自動人形化」を意識化し、真に自由な個人へと近づこうとする営みである。これが上記の「積極的な自由」の意味するところでもある。

以上見てきたように、宗教改革以来のドイツの権威主義的思考が近代ドイツ社会と人間をも呪縛し続け、それが最も完成された権威主義的社会であるナチス体制を準備する内的要因であったことを、『メトロポリス』が映しだしていることが明らかになった。一方では、自由競争を基盤とする自由主義的な資本主義社会が、実は人間の内的な自由をうばう危険性のうえに成り立っていることを『モダン・タイムス』が明らかにしていることもわかった。いずれの状況も、個人の自由が高度に発達した資本主義的文明社会において危機にさらされてい

ることを示している。個人は近代社会における孤独と不安から目を背けるため、片や新たな強い権威に積極的に服従し、片や「匿名の権威」に誘導されて自己を喪失する。これが、フロムの言葉を借りれば「自由からの逃走」ということになる。外的な束縛から解放された近代的個人はつねに、このように内在的に自由を喪失してしまう危機にさらされている。しかし、これは個人に与えられた変えようのない運命なのであろうか。チャップリンの反抗は、まさにこの問いに対する回答を観客に与えようとしている。チャップリンはあくまでも、「空虚な殻になってしまった個人主義」¹⁰⁾をもう一度あるべき姿に取り戻し、自己を確立しようと闘っているのである。このように、『モダン・タイムス』におけるチャップリンが徹底した個人主義を基盤にして自由を求める個人を表現する一方で、『メトロポリス』は全体主義社会の内的メカニズムを人間の権威主義への屈服と自由の放棄の物語りとして描いているという意味で、この二つの映画は20世紀前半におけるデモクラシーとファシズムの本質を明らかにしているといえる。最後にもう一度フロムの言葉を借りれば、「デモクラシーは個人の完全な発展に資する経済的・政治的諸条件を創り出す組織である。ファシズムはどのような名のもとにしる、個人を外的な目的に従属させ、純粋な個性の発展を弱める組織」¹¹⁾なのである。

ナチや軍国主義日本のような強力なファシズムは消滅したものの、個人の自由を抑圧するファシズム的な力はいまでも世界のいたるところに存在する。見せかけだけの自由主義社会ではない真のデモクラシーを打ち立てることの重要性和難しさを訴えている『モダン・タイムス』と『メトロポリス』は、今日でもそのアクチャーリティーを失っていない。

注

- (1) ジークフリート・クラカウアー：『カリガリからヒトラーへ』、1995年、154頁
- (2) クラカウアー：167～168頁
- (3) エーリッヒ・フロム：『自由からの逃走』、1994年、284頁
- (4) 前掲書：284頁
- (5) 前掲書：126頁
- (6) 前掲書：121頁
- (7) 前掲書：189頁
- (8) 前掲書：203頁
- (9) 前掲書：204頁
- (10) 前掲書：122頁
- (11) 前掲書：297頁
- (12) 前掲書：300頁